

《跋》ホダルコフスキーさんのこと

宮脇淳子

私が本書の著者マイケル・ホダルコフスキー氏に初めて会ったのは、一九九〇年夏にハンガリーのブダペストで開催された、第三十三回常設国際アルタイ学会 (Permanent International Altaistic Conference、略称PIAC) の席上である。彼も私も三十代だった。

彼の研究分野が、私の専門である「最後の遊牧帝国ジュンガル」の西端、ヴォルガ河畔に移住したモンゴル系遊牧民の歴史だったから、そのときすでに私は彼の名前を知っていた。

一九八七年、米国インディアナ大学で第三十回PIACがあったとき、私の夫で師でもある岡田英弘は、自分がかつて米国で経験したことを私に追体験させようと考えて、一カ月かけて米国の各地を訪問した。

まず訪ねた岡田の恩師、シアトルのワシントン大学のニコラス・ポッペ Nicolas Poppe (1897-1991) 先生は、ドイツ系ロシア人で、若くしてロシア科学アカデミー会員になった二十世紀を代表するモ

ンゴル学者だが、第二次世界大戦中にカフカス地方で現地調査をしていたときドイツ軍の占領下に入り、ドイツ軍の通訳をしたこともあって、ドイツ軍撤退とともにソ連を離れたのである。

ハーヴァード大学のオメリアン・ブリツァーク Oncljan Pritsak (1919-2006) 先生は、ウクライナ生まれのロシア史学者で、愛国主義的なロシア史ではなく、草原から見たモスクワ国家の勃興を公平に論じたその研究は、岡田著『世界史の誕生』のロシア史に大きな影響を与えた。

ブリツァーク先生は、私がジュンガル研究をしていると聞いて喜んでくれ、ホダルコフスキー氏を私に紹介した。一九九〇年に初めて彼に会ったとき、彼も恩師の一人であるブリツァーク先生から私の名前を聞いていたので、すぐに親しくなった。

中央ユーラシア草原の東から西まで拡がったモンゴル系遊牧民は、自ら残した史料は少なく、さまざまな言語史料に断片的に登場する。彼はロシア語・トルコ語・アラビア語ができ、私はモンゴル語・満洲語・チベット語・漢語が読める。それぞれ得意な言語を使って、東と西から草原に光を当てよう、研究をこれから助け合おう、と約束した。

そのあと彼はすぐに、ロシア連邦タタルスタンのカザン大学で「ジュンガルの系図」を見つけたと知らせを寄越し、コピーが私に届いた。一七五五年にジュンガルが滅びたとき、一度は清朝に投降しておきながらロシアに逃げたアムルサナーと彼の部下が持参した系図のロシア文字への翻訳で、漢語や満洲語史料にない人名が散見され、その後、私は国際学会で何度も報告した。

一九九二年に、彼の母校であるシカゴ大学でロシア史学会が開かれたとき、同日程で、台湾で世



1994年、常設国際アルタイ学会（PIAC）で。
右から M. ホダルコフスキー氏、岡田英弘氏、筆者

界中のモンゴル学者が集まる会議があり、岡田と私に両方から招待状が届いた。台湾には岡田が行き、私は独りでシカゴ大学に行った。私にとっては初めての単独での国際会議参加だったが、ホスト側の彼はとてもよく世話をしてくれて、本当に楽しかった。

一九九四年、フランスで開かれた第三十七回PIACで再会し、そのあと岡田と二人でベルリンに移動して、ベルリン自由大学教授のドイツ人トルコ学者の家に泊まったとき、ホームパーティーに彼はドイツ人のガールフレンドを連れて来た。そのときの写真を私は大事に持っていたが、二〇二二年に再会した際、彼女と結婚したと聞いたので、写真をようやく渡すことができた。

一九九五年、彼の単著『二つの世界が会おうところ ロシア国家とカルムイク遊牧民、一六〇〇―一七七一年』の私の書評が『東洋史研究』に掲載された。英語の本をもれなく丁寧に読んだのはこれが初めてかもしれない。拙著『最後の遊牧帝国 ジューンガル部の興亡』（講談社選書メチエ、一九九五年）にも、その内容を大いに利用させてもらった。

このあと、彼はモンゴル系遊牧民からカフカスの少数民族に興味を移し、私も満洲史や朝鮮史の仕事が増えて中央アジアから遠ざかったので、連絡が間遠になった。

二〇〇六年に岡田が心筋梗塞を起こしたあと、私も国外に出なくなった。二〇一七年に岡田が亡くなり、二〇一八年にキルギズで開催された第六十一回PIACに、私は十一年ぶりに参加した。

二〇二二年五月、ホダルコフスキー氏から突然連絡が入った。北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターに招かれて札幌にいる、東京に行くから会いたいという。一日目は夕食を共にし、二日

目は朝十時から夕方六時まで、上野から浅草、駒込と案内しながら、ほぼ八時間話し続けた。会ったのは二十八年ぶりだったけれども、話し続けている間に自分の英語がどんどん上手になるのがわかった。互いに理解できないことは一つもなかった。

彼が私に「ボク、すごく面白い本を出したんだよ」と言った。それが本書である。藤原社長に私が推薦し、拙著のライターをしてもらったことのある山内智恵子さんに翻訳を頼んだ。

彼の生い立ちについてはだいたい聞いていたが、日本人読者のために書いてもらった「自伝的覚書」を読んで、彼がどんなに苛酷な人生を歩んできたかをあらためて知った。彼のシカゴ行きを賛成したために職場を首になったが両親はその後どうなったのか、と聞いていったら、両親と妹は一九九一年に米国に移住し、両親は二〇一一年、どちらもガンで亡くなったと返答があった。それでも二十年間米国暮らしができたわけである。妹はシカゴ郊外で暮らし、その二人の子供たちは結婚して米国にいるそうだ。

Books, 2015.

Soldatov, Andrei *The New Nobility: The Restoration of Russian Security State and the Enduring Legacy of the KGB*. New York: Public Affairs, 2010.

彼自身にも娘と息子がいる。

日本人読者にロシアの本当の姿を知ってもらえるのは嬉しい、本書が日本の将来の役に立てたら幸いだと、著者は日本版の刊行をとっても喜んでいる。

(みやわき・じゅんこ／東洋史家)

訳者紹介

山内智恵子（やまのうち・ちえこ）

1957年東京生まれ。国際基督教大学卒業。津田塾大学博士後期課程満期退学。日本IBM株式会社東京基礎研究所を経て現在英語講師。近年は、アメリカのインテリジェンス・ヒストリー（情報史学）や日米の近現代史に関して研究し、各国の専門書の一部を邦訳する作業に従事している。

著書に『ミトロヒン文書——KGB（ソ連）・工作の近現代史』（2020年）、『インテリジェンスで読む日中戦争』（2022年、以上ワニブックス）。

ロシアの二〇世紀——100の歴史の旅

2023年3月30日 初版第1刷発行©

訳者 山内智恵子

発行者 藤原良雄

発行所 株式会社 藤原書店

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523

電話 03（5272）0301

FAX 03（5272）0450

振替 00160 - 4 - 17013

info@fujiwara-shoten.co.jp

印刷・製本 中央精版印刷

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバーに表示してあります

Printed in Japan
ISBN978-4-86578-382-7

著者紹介

マイケル・ホダルコフスキー（Michael Khodarkovsky）

1955年、当時ソ連のウクライナ・キエフ（現キーウ）生まれのユダヤ人。同じくソ連領内のカルムイク自治共和国に出来たばかりのカルムイク大学で言語・文学・歴史を学ぶ。1978年、23歳でソ連を離れアメリカに移民。翌年、シカゴ大学大学院に入学。1987年、博士号取得。

現在、米シカゴ・ロヨラ大学教授。専門は、アジア地域・民族に対するロシアの征服と支配の歴史。シカゴ大学、ベルリン・フンボルト大学、ライプニッツ大学ハノーファー校、レーゲンスブルグ大学、北海道大学等で客員教授をつとめる。

著書に *Bitter Choices: Loyalty and Betrayal in the Russian Conquest of the North Caucasus* (Cornell University Press, 2011), *Russia's Steppe Frontier: The Making of a Colonial Empire, 1500-1800* (Indiana University Press, 2002), *Where Two Worlds Met: The Russian State and the Kalmyk Nomads, 1600-1771* (Cornell University Press, 1992), *Of Religion and Empire: Missions, Conversion and Tolerance in Tsarist Russia* (Cornell University Press, 2001, 共編) 他。